

# 萩原朔太郎「ニーチェに就いての雑感」について

河 内 信 弘

## 1

「神は死んだ」というニーチェの言葉は多くの人々に

深い影響を与えた。このような言わずもがなの言葉から始めるのはいささか躊躇されるのだが、ニーチェの影響の意味を少しでも考え直そうとするならば、このように書き出すほかはない。「『ニーチェ』の全体像を驚づかみにした場合、『神は死んだ』というショッキングな発言こそ、彼の真理であり生命であったからで、結局彼の生涯は、神との格闘にはかならなかったからです」(『ニーチェ全詩集』秋山英夫・富岡近雄訳あとがき)と述べら

れている。

さてキリスト教圏外の日本においてこの「神は死んだ」の内容はどれほどまでに理解され、影響を与えたのだろうか。

まず神という語からして決定的問題を含んでいる。

Gott, god と言いつても何も始まらない。これを神と訳そうが、そのまま考えようが、キリスト教圏内で果たしてきたその語のおよそ二〇〇〇年の長きにわたる歴史的重み、役割を知り、無意志的にまで血肉化したものを持っていた人が、いわば、「神は死んだ」という言葉そのものの重みを体感できた人がどれほど日本に存在したのであろうか。あるいはそれを理解しえた人がどれほ

どいたのであろうか。

このような問の立て方をするならば、おそらく、あまりにも有名なこの言葉を正しく理解し、受け入れることのできた日本人はあまりいなかったと言っても誤りはないであろう。それにもかかわらず日本においてもニーチェは広く影響を与えた事実に変わりはない。

## 2

その一例として萩原朔太郎（一八八六—一九四二）をあげることが出来る。朔太郎のニーチェへの言及は評論や随筆の中に散在し、極めて多い。

朔太郎は「ニーチェに就いての雑感」の後半部でおよそ次のように述べている。

ニーチェの名は文壇に早くから紹介され、大正時代の文壇では、一時トルストイやタゴールと並んでニーチェも流行児であったが、その影響は皆無であり、例外は芥川龍之介ただ一人であった。ニーチェは難解のゆえに、理解されなかった。それだけでなく日本の詩人や文学者

は「哲学する精神」を所有していない。この精神を欠いた詩人や文学者にとってニーチェが不可解であったのだ。ベルグソンやデルタイの言うように、真の意味の哲学者とは、哲学を学問する人ではなく、哲学する精神を氣質し、且つメタフィジックを直感する人のことであり、いわゆる哲学者ではなく詩人なのだ。ところが日本人は昔から「言あげせぬ国民」であり、思考したり、哲学することを好まない。ニーチェは何よりも詩人であった。しかし、そのポエジイには、多くの深遠な思想や哲学が含まれている。内容を理解し得ないでは、ニーチェの詩を感情し得ない。哲学する精神によってのみ理解される。その哲学する精神を欠いた日本の詩人や文学者にとってニーチェが不可解なのは当然と言わなければならない。彼らは動物のように感覚がよく発達している。その不思議な独特の叡知によってボードレエル、ドストエフスキ、象徴派を、自然主義の文学を嗅ぎつけた。しかし、この知叡だけではニーチェを嗅ぎつけることができない。

およそ以上のようなことを述べたあと、

鴉等は鳴き叫び

風を切りて町へ飛び行く。

まもなく雪も降り來らむ

今尚、家郷あるものは幸なるかな！

一八八四年の秋の「孤独」と題された詩のこの冒頭の  
一節を引用し、その情感の深く悲痛なることにおいて、  
他に全く類を見ないニーチェ独特の名編として、そして  
世界文学史上にも特筆されるべきものとして朔太郎は引  
用している。(朔太郎によって言及されたニーチェにつ  
いてはニーチェと表記する。)

朔太郎の心を取りわけ捕らえたのは、おそらく、四行  
目であったと想像される。故郷を失ったものの孤独を歌  
う一行である。

### 3

朔太郎をして、私が心から畏敬し、真に頭を下げると

ころの詩人は、北原白秋以後に於て、ただ大手拓次君あ  
るのみである、と言わせた同郷の大手拓次を論じたもの  
の最後が次のように結ばれている。「けだし日本の異邦  
人である私等には、初めから『故郷』といふ觀念がない  
のである。国定忠次の昔からして、私等の血統は漂泊者  
であり、草鞋をはいて諸国を放浪する無宿者だった。私  
の同郷の善き詩人が、すべて皆心の家郷を持たないとい  
ころの、コスモポリタンの漂泊者であったのは当然である。」

朔太郎を捕らえて離さなかった感情のひとつは故郷の  
喪失であったと思われるが、朔太郎には故郷の喪失とい  
うより、故郷への嫌悪に近い感情があったようだ。その  
感情の中には、自分を異邦人と言ひ、コスモポリタンの  
漂泊と言ひつつも、どこか広がりと深みを欠いている。  
心から畏敬する詩人を論じて、国定忠次の名をあげてい  
ることは朔太郎の心に潜んでいる卑小なものを、ふと、  
漏らしてしまった感がある、と言っても誤りはないであ  
ろう。

ニーチェ十五歳の詩をあげてみよう。

## 郷 愁

こころなごむ晩鐘は

野をこえて はるかに鳴りわたり、

まごうかたなく

ぼくの心に教えてくれる。

この世にあって 故郷と 故郷の幸を

見いだしたものは いないのだと、

―大地から生まれ出ずるや否や、

ひとびとは大地へ帰郷するさだめ。

かく鐘の音の鳴りわたるとき、

ぼくの心を吹きぬける言葉は、

ひとびとはだれしも、永劫の故郷への

巡礼者 という言葉なのだ。

大地から つねに身をとき放ち

故郷の歌を そして

あの至福の想いを

歌いあげる者たちは幸いなり！

(富岡近雄訳)

故郷とは生まれ育った地そのものであるかもしれないが、一方一個人の精神を育む故郷の概念を越えて、人そのものが生まれ育ち、精神を育むものとしての故郷、歴史を貫いて存在する故郷でもあろう。そしてさらにそれをも越えるものでもある。十五歳の詩にそれがはっきりと響き出ている。

もともと西洋文化のなかに、本来異郷のものであるはずの旧約聖書を自己の歴史として受け入れ、樂園喪失を自己の歴史と受け取る素地があった。とりわけゲルマン民族の歴史はフンに追われて故郷を捨てなければならなかったことから始まる。そのことを伝承として断片的に伝える叙事詩エッダ、文学作品として見事に結実したニーベルンゲンの世界を読むならば、故郷を追われたものたちの復讐をあらわにしたその荒涼たる心象風景と、その陰惨さには驚かされる。ニーチェ研究ではよく知られているニーチェ二〇歳の詩「知られざる神に」は、最後の一節を引用するに止めるが、この間のことを含んだの詩でもあった。

知られざるひとよ、ぼくはあなたを知るつもりだ、  
 おお、ぼくの魂に深くいこんで来るひとよ、  
 ぼくの生命のなかを嵐のようにさ迷い歩くひとよ、  
 おお、不可解なひと、ぼくの近親者よ！  
 ぼくはあなたを知り　みずからあなたに仕えるつもりなのだ。

(富岡近雄訳)

故郷への巡礼は我々の知り得ない歴史の重みを含んでいる。ニーチェの故郷を持つ、持たないとは、突き詰めて行くと、そのようなものを背景としているのであり、それは朔太郎のそれとはおおきな隔たりがあると言わなければならない。それは朔太郎という一人の詩人の問題だけではない。

われわれ日本人にとって樂園喪失は歴史を貫くテーマになりえないし、失われたものを取り戻す、あるいは再建するということも、また、歴史のテーマとはなり難い。エッダの世界とくらべるならば、古事記の世界のなんと

明るいことか。そもそもわれわれ日本人はその歴史の始めに、戦いに破れ、故郷を追われたことはないのである。絵画の題材、詩の題材として古くから主要なテーマを振り返ってみれば、樂園を追われたアダムとイヴのごときものがあるだろうか。またこれに匹敵する、繰り返し題材とされてきたものがあるだろうか。恐らく朔太郎が故郷を思うとき、朔太郎自身の故郷への思いに止まらざるをえないのも、その歴史の相違と深くかかわりがあると言うべきであろう。

そもそも日本人にとって歴史とは何であろうか。われわれの心にある歴史とは、依然として生々流転、人は旅し、旅に没する、その思いではなからうか。

4

朔太郎はニーチェに、近代の苦悩を一人で背負った受難者を見、新時代の痛ましい殉教者を見るのだが、形而上学者としてのニーチェ、倫理学者としてのニーチェ、文明批評家としてのニーチェを追跡することはできなかった

た、と率直に述べている。

「ニーチェは正しく僕の『先生』である。だが僕の学んだ部屋は、主としてニーチェの心理学教室であった。形而上学者としてのニーチェ、倫理学者としてのニーチェ、文明批評家としてのニーチェには、僕として追跡することが出来なかった。換言すれば、僕は権力主義者でもなく、英雄主義者でもなく、況んやツァラトストラの弟子でもない。僕は『心理学』と『文学』だけを彼に学んだ。」

朔太郎のあげるままに従うが、形而上学、倫理学、文明批評、これらはヨーロッパの歴史の流れを考えると、これらこそ歴史を貫く太い骨格の役割を果たして来たものであり、それらと比べればいわゆる心理学は新しい。ようやく十九世紀になって神に向けられた心理の背後に、神を作り出した人間の心理がおのずと見えてくるようになってきたのである。無意識の世界に目が向けられ、心理学の世界が切り開かれて行った。「むかしは、存在する一切のものは精神的な神の創造的意志から生まれたものであることが、自明の前提であったように、十九世紀

は一切が物質的な生じるといふ、同じように自明の真理を発見したのであります」と、ニーチェの死後およそ三十年の後、ユングは皮肉を込めて時代を支配する精神というものを述べている。かつて人間の上に君臨していた絶対的な権威に寄りかかることができなくなれば、新たな権威を打ち立てそこに身を寄せて安住しようと、人間は試みるわけである。ともかく絶対的権威としての神、それに基礎づけられたものへの問い、批判、人間そのものの存在に目を向けるほかはない現実が否応無く姿を現してきたのであり、ヨーロッパを支えていたキリスト教の外側の、象徴的に言えば、伽藍は堅牢に見えたが、内部の腐食は進んでいたのである。ニーチェ以後のことになるが、心理学を切り開いたフロイド、ユング、アドラーが精神病理学者であったことは興味深い。

だが、実は多くの人々には依然として伽藍は堅牢であることに変わりはないといえるのではなからうか。ニーチェはひとりそれに痛烈な表現を与えて、誰ひとり聞き取ることのない孤独の中で挑んだのだ。それはそれまでの世界を皮相的に分析、批判するのではなく、その

根底に、つまり神に目をむけることであった。ここに「心理学」がおおきな位置を占めた。しかし、それは「形而上学」と「倫理学」と「文明批評」は分かち難く結び付いている。

## 5

朔太郎もまた、ニーチェの次の世代に属してはいるが、闘うべき対象が明らかに存在したと言う意味では時代をほぼ同じくするといつてよいであろう。それはニーチェが指摘した状況が広く現実として認められるようになった時代に生きていたという意味である。旧来の価値の崩壊は世界的な規模で進み、「神は死んだ」という言葉から象徴的に理解される状況が日本にも広がっていた。人間という存在が、もはや必然なものとして肯定することができなくなり、ただ偶然の中に放り出された状況となったのである。本来の意味での神の死は、異邦の我々には観念的には理解できても、本質的には理解しがたいものであったであろうが（また現在においてもなおそうであ

ると思われる）、ニヒリズムは日本においても大きな広がりを持ったのである。朔太郎が芥川龍之介を論じて、「自殺の二三年前から、その作品の風貌を全く変えたが、これはニーチェの影響であったことは、『歯車』『西方の人』『河童』等の作品によく現れている」と言ったが、その『歯車』のなかに次のような一節がある。

「僕は二度も僕の目に浮んだダンテの地獄を詛いながら、じっと運転手の背中を眺めていた。そのうちにまたあらゆるものの嘘であることを感じ出した。政治、実業、芸術、科学、——いずれも皆こう云う僕にはこの恐ろしい人生を隠した雑色のエナメルにはかならなかった。僕はだんだん息苦しさを感じ、タクシイの窓を開け放ったりした。が、何か心臓をしめられる感じは去らなかった。」

朔太郎の言うニーチェの影響を『歯車』の文章の中から強いて見いだそうとするならば、この一節をあげてよいであろう。「雑色のエナメル」。すべての内実は嘘と化してしまったのである。その内実をそれまで支えて来たものは、明らかに、ニーチェの云う神ではない。しかし、「神は死んだ」の一言によって象徴的に受け入れること

のできる空虚な状況がすでに訪れていたことは明らかである。『歯車』は全編、この息苦しさ包まれ、微塵の甘さもない、透徹した絶望の目に支配された小説である。

朔太郎は芥川龍之介について次のように述べている。

「彼は自分に反逆した。彼は憤怒し、そして一つの超人的勇躍を試みた。『河童』が『西方の人』が『歯車』が、それから最近の多くの作物がさうであり、転機への黎明的な予想を見せている。」

絶望に目を逸らさず、荒涼たる自己を生き、絶望を書き切ることが、朔太郎の言葉を借りれば「超人的勇躍」であり、「転機への予想を見せている」ということであろうか。「けれども此処に、彼の著しい破綻が感じられた。彼の書こうとした熱情は、いつも埋れ火の如く、微光する影の如く、さうでもない他の断層——氣質的及び教養的断層——の下に埋積された。彼はしばしば力を感じた。そして実に長い間、見るも無残な、悲壮な痛ましい戦いが続けられた。」と、朔太郎は述べている。

「ニイチェに就いての雑感」を朔太郎は次のように結んだ。

「元来、僕は氣質的にデカダンスを傾向した人間である。僕がポーやドストエフスキーに牽引されるのも、つまりは彼等の中に、異常性格者のデカダンスがあるために外ならない。僕のような人間が、もし自然のままの傾向で情力して行ったら、おそらく本格的のダダイストになったにちがいない。それが幸い（だが不幸だか知らないが）一つの昂然たる貴族的精神によって、今日まで埋没から救われているのは、ひとへに全くニイチェから学んだ訓育の為である。そしてこの一事が、僕のニイチェから受けた教育のあらゆる『全体のもの』なのである。」

しかしながら、朔太郎は「ニイチェに就いての雑感」の中でただの一度も「神は死んだ」に言及することはないかった。

## 6

「僕等の年齢の文学者と、今の時代の青年作家との間に於ける心理上のギャップといふこと」を朔太郎は中島



健蔵の文章から知ったと「青年に告ぐ」で書いている。

「中島氏の説によると、今の時代（これほど文学者にとっての『悪しき時代』はない。）のインテリ青年や文学者は、すべて一種のデカダンであるといふのである。

しかしそのデカダンスは、過去に言われた意味の世紀末的デカダンスとはちがふのである。昔のデカダンスといふのは、常識や世俗に対する一種の消極的反抗であり、本質に於いてモラリスチックのものであったが、今の青年のデカダンスは、もっと安易で、無気力で、反抗をもたない『その日暮らし』のものだといふ。つまり毎日一杯の紅茶を飲んで満足し、どうせなるようにしかならない人生を、捨て鉢にあきらめて居るのだといふ。つまり今日、あの疲労しきった無希望のサラリーマンが持っている心理と、丁度同じようなデカダンスの心理が、文学青年の中にも感染して居るのだといふのである。

言われてみれば、これは僕の周囲の青年等にも、しばしば思い当たることである。『あなたが羨ましいのではない。あなたの生まれた時代が羨ましいのだ。』と、丸山君がいつも多少の怨恨と敵意をさへも含めて僕に言ふ

が、さうした青年達の悲しい心理が、今では僕にも解つて来た。何の希望もない人生！その紋切り型の言葉は、僕の時代の文学者等も、昔から口癖のように言い続けて来た。しかし僕等は無理にもその人生に反抗して、希望を見つけることに熱情したのだ。デカダンスといふ言葉は、僕等にとってその熱情主義のイロニイであり、敗北主義の勇ましく悲壮なる軍歌であった。しかし今では時代がちがふ。今の時代の青年には、その悲壮な軍歌さへ歌えないのだ。」

この「青年に告ぐ」が収められたのは昭和十二年（一九三七）、戦争もまじかのころである。朔太郎の次の世代もまたその時代の受容はすでに変わっている。それぞれの人間が自己の精神を確立し、思想を形成する過程はそれぞれ異なる。育つ環境、時代など、その影響を受けつつ人は生きて行くのだから、世代によるどこか微妙な共通性が見いだされることは当然であろう。現代からすれば軍歌などという言葉はとうに消えているといっていない。しかし、そのような個々の言葉に捕らわれることがなければ、朔太郎の言葉は「現世代」を、朔太郎に向け

られた次の世代の言葉は、恐らく今も「次の世代の」感情を象徴して現していると言えるであろう。

## 7

現在はニーチェその人と著作の資料もほぼ全貌が明らかになっている。その研究も膨大なものとなり、孤独の中に生きたと言っているニーチェが、精神史の中で確かな位置と役割を定められている。これに比べれば朔太郎の使い得た資料はわずかであると言ってよいかもしれない。「ニーチェを理解することは、何より先ず、彼の文学を『感情する』ことである」と言った。その理解は彼自身が認めているように、はなはだ一面的で主観的であるのだが、行き届いた理解が必ずしも正しいとは言いがたいであろうし、人に大きな影響力を振るうとも言いがたい。朔太郎のニーチェ理解が、ニーチェ理解として正しかったか、あるいは深いものであったかを云々しても意味はないのであり、朔太郎にとってニーチェは大きな意味を持っていたということを述べることで十分であろう。

「だいたい、プラトンがわかるなどというのは、べつに大したことではありません、自分自身がプラトンになり、えっちらおっちら、つまずきながら考えるのではなくてはだめです。網は魚をとるだけです。しかし、海から引き離された魚とは、いったい何ですか。」

このアランの言葉は、もし自ら考えることを第一とするならば、今もなお、そしてこれからも正しいであろう。たとえ狂気をも含む極めて危険なニーチェであれ、理解しようとするならば、おそらくこのアランの言葉に従わなければならないであろう。さらにニーチェの背後にあるギリシャからはじめて、牧師の子として教会に育ったこと、つまりキリスト教に思いをこらさなければならぬこと、我々日本人がニーチェを理解しようとするならば、思想を追い、知性と感性を研ぎ澄ましても、歴史の底に流れる闇のようなものに思いをこらしつつも、追体験に止まらざるを得ない。

こうしてみると、「彼らは動物のように感覚がよく発達している。その不思議な独特の叡知によって」と他に向けた非難は、朔太郎自身に帰ってくるかのである。

それは朔太郎を批判するという意味ではない。ニーチェの全体像を過不足なく知り得るようになったとしても、なおニーチェ理解のためには、われわれ日本人にとって大きな深い淵が横たわっていることを、知らなければならぬと同じ意味合いで言っているのである。

## 8

一九六六年来日したフランスの哲学者ガブリエル・マルセルと評論家小林秀雄との対談がある。

マルセル モーツァルト晩年の弦楽オーケストラのためのアダジオとフーガをご存じですか？ 私は大変に好きです。

小林 私も好きです。

マルセル 短いけれどもモーツァルトの本質的なものがみなあると思いますね。

小林 私は或る時、五九三番のクインテットを聞いて、大変感動したんです。どうして感動したかよくわ

からないけれど、非常に悲しいものがある。日本人の「悲し」という言葉は万葉のころからありますが、そのような明るい悲しみなんです。それからアンリ・ゲオンの本を読みました、その中で「<sup>アラント</sup>軽快な悲しみ」という言葉を使っていたので、なるほどと思いました。

マルセル ようんだ、停滞した悲しみではないというわけですね。

小林 若いころ僕たちは、外国のものを、文学は翻訳または字引、絵は複製、音楽はレコードで知ったわけですね、それにしても西欧的なものの魅力に動かされたと思っていましたが、このごろは全くそうじゃないということがわかりました。やはり日本人として受け入れるものだけを受け入れて来たことがわかってきました。

## (中略)

小林 ベルグソンが晩年沈黙を守ってしまいましたが、その点どうお思いですか。わたしは大変おもしろいことだと思っています。

マルセル ベルグソンは晩年大變病身でした。だがその晩年で誤りだったと思うことがあります。それは、死後、ノートや遺稿の類を全部破棄するよう言ったことです。これは完成したもののだけを与えたいという一種の美学的なコケトリリーだと考えます。

小林 いや、そうではなくて、ベルグソンが私にはわかるように思えます。

マルセル あれほどの哲学者は、模索、躊躇のあとを残して、後の探求者に指標を与えるべきであったと思います。

小林 そうでしょうか。私にはベルグソンの沈黙がよくわかります。病気で黙らされたのか、それとも黙るつもりで黙ったのか。日本の宗教家、哲学者の中には、黙ろうと決心して黙った人がたくさんいる。黙ることが人類にプラスかマイナスかなど、そんなことは考えない。黙ることは正しいという思想があります。

マルセル たしかに東洋の思想の一番の問題でしょう。

それは歴史感覚の欠如ではないか。

小林 欠如ではないのです。むしろ歴史の否定です。マルセル なるほど……歴史の否定……ベルグソンの場合は、そこまではいいっていないと思うが……。

モーツァルト、およびベルグソンの晩年の沈黙に対するこの短い対話の引用の中に、歴史に対する我々とヨーロッパの根本的態度の違いがよく出ているであろう。われわれは歴史を通して神の意志が実現されるというごとき歴史に対しての意識はなかった。歴史をとおして人間の真実が現れ出てくるというごとき歴史に対する見方もない。歴史によって自己の存在を肯定する思想もない。言わば神を殺し、神によって造られた必然の存在としての人間を偶然の中にほうり出したニーチェが、そのような人間存在としての自己に耐え切れず、必然的なものとしての自己を証明しようとし、肯定しようとして永遠回帰を持ち出す苦悩を、理解は出来ても、実は感覚的には分らないのである。神の存在を否定し、神によって支えられていた存在の崩壊を、別の思想を持って支えよ

うとする苦悩が、孤独の中で容易ならざるものであったと深く理解出来ても、実は我々の思惟からは遠いと言わざるをえない。小林秀雄が歴史の否定というとき、日本には歴史によって自己を、人間の存在を位置付け、肯定する思想はないということと考えてよいであろう。

さらに本稿では何も触れてはいないが、日本人の中に流れている無とか空とかというものは、本来存在したものがなくなったという無でも、空虚でもないのである。

こうしてみると、朔太郎のニーチェ受容は、日本人として極めて典型的受容であったと言えるかもしれない。はつきりと受け入れられるもの、「感情できる」ニーチェを朔太郎は受け入れて、感情できないニーチェは受け入れなかったのである。朔太郎が「神は死んだ」に言及することがなかったのは、極めて象徴的であり、日本人にとって象徴的意味を持つものでもある。

#### 参考文献

以下、引用および参考にした文献をあげるが、その引用箇所の明示は省略する。

『萩原朔太郎全集』（第四巻及び第五巻）新潮社、昭和四一年

第四巻所収『廊下と室房』のうち「ニーチェに就いての雑感」「日本への回帰」のうち「異邦人としての郷土詩人」「無からの抗争」のうち「青年に告ぐ」など。第五巻所収「詩人論」のうち「芥川龍之介の追想」など  
『ニーチェ全詩集』秋山英夫 富岡近雄訳、白水社、昭和四七年

『心の構造―近代心理学の応用と進歩』（ユング著作集三）C・

G・ユング 江野専次郎訳、日本教文社、昭和六一年

「現代心理学の根本問題」

『芥川龍之介全集6』筑摩書房、一九八七年

『文学折にふれて』（アラン著作集八）杉本秀太郎訳 白水社、

一九九七年

「私の精神よ、あなたに話したいと思います」

『技術時代における聖なるもの』（G・マルセル著作集別巻）

福井芳男他訳、春秋社、一九六六年

「対談 G・マルセル 小林秀雄、一九九六年」